

# 建築職人アーカイブ調査 中間報告概要

(公社) 富山県建築士会 職人アーカイブ委員会

## 1. この調査の背景と趣旨

### (1) 手作り技術の衰退

木造在来工法の王国であった富山でもプレカット率が90%に近くなり、手刻みの大工は減亡しつつある。また、和風の住まいとして大きな意味のあった畳に関しても畳屋さんの数がこの10年で1/10に減少した。

手仕事の職人の減少は家づくりの近代化に伴う宿命ではあるが、ストックの時代として、既存の住宅の改修やコンバージョンには手仕事の職人は不可欠である。

### (2) 職人の減少

どの職種団体も若い人が職人にならないという問題を抱えており、職人の存在価値を引き上げなければこの職人の減少はとどまらない。

設計者にとって設計したものを造ってくれる職人がいなくなることは重大である。

また、喫緊の状況として戦後60余年の建築生産の歴史を担ってきた職人は高齢になっており記録も残すことができなくなることがある。

### (3) 職人の記録保存

伝統技能の記録のみならず、近代化に伴う技術の変化にどのように職人が対応し、新技術に適応してきたかの経緯を記録に値する。

常に技術革新が起こる状況下で、建築産業の将来像を見据えるための参考になる。

### (4) 公表

コストが高くつき、時間がかかる手仕事は市場経済の中で生き延びるには建築主の理解が不可欠であることから、調査結果をすみやかに公表する。

職人の個人史の公表を行うことにより広く職人の存在とその果たした役割を建築士だけでなく、県民に再認識してもらい、職人の存在意義を広く啓発することを目指す。

## 2. 過去の調査の経緯

### (1) 平成23年度

- 一次調査で建築士会12支部での職人のリストアップ  
25職種、116名
- 二次調査でヒアリングを14職種24名実施

### (2) 平成24年度

- ヒアリングを5職種9名実施
- 富山県建築士会月刊紙(ホットライン)で公表を開始  
平成24年度までのヒアリング実施調査件数  
19職種、33名

## 3. 平成25年度の調査

- ヒアリング調査は17職種29名実施  
これまでの累計は25職種62名となる。

## 4. 今後の予定

平成26年度は不足職種と業種団体へのヒアリングを含め、補足調査を実施し、最終報告をまとめ、年度中に普及冊子として編集印刷し、広く配布する。

## 5. 調査職種と調査職人数(平成25年度まで)

No	職種	職人	No	職種	職人
1	大工	13	14	タイル	1
2	宮大工	3	15	建具(指物)	7
3	木挽	1	16	木彫	1
4	製材	2	17	畳	4
5	銘木加工	2	18	配管工	1
6	鋸目立職人	1	19	型枠大工	2
7	漆塗り	2	20	鉄骨加工	2
8	古代色塗装	1	21	アルミ鋳物	1
9	トントン葺	1	22	石材	1
10	瓦	1	23	造園	4
11	板金	5	24	曳家	2
12	銑金物	1	25	杭打設	1
13	左官	2		合計	62

## 6. 富山の建築に関わる職種とその職人

**建築大工** 今回の調査対象者の居住地は富山市内が最も多いが黒部、砺波など県内全域に13例となった。年齢は63歳から94歳と幅広いが高齢者が多い。大工としての修業開始年齢は中学卒業後の15歳が多く、修業先は家族が多いようだ。大工として何代か続いている方もいた。修業期間は他の業種に比べると比較的長い。今までの調査では建築大工の系譜を判別できなかったが、厳しい徒弟制度の中で技術を伝承していたことが伺える。調査対象者の居住地は富山市内が最も多いが黒部、砺波など県内全域に13例となった。年齢は63歳から94歳と幅広いが高齢者が多い。大工としての修業開始年齢は中学卒業後の15歳が多く、修業先は家族が多いようだ。大工として何代か続いている方もいた。修業期間は他の業種に比べると比較的長い。今までの調査では建築大工の系譜を判別できなかったが、厳しい徒弟制度の中で技術を伝承していたことが伺える。

**宮大工** 県西部の大工の系譜として知られる氷見の大窪大工は加賀藩前田家のゆかりの職人集団としてこの地に大工技術を伝承したことは周知である。この系譜を受け継ぐ藤岡氏(氷見市)は氷見を中心として能登、羽咋などの近隣だけではなく京都へも仕事に出かけるなどしている。

**木挽き職人** 21歳で親戚の手伝いとしてこの道に入った大平氏(富山市八尾町)は野積地区で唯一の木挽だそう。かつてはまさかりを使って木を伐り、昭和35年ころまでは移動機版を使ってその場で挽いていたそう。チェーンソーが出てからは効率化した。

**製材** 尾山氏(朝日町)は材木販売から製材業へ転換した際に機械化を行った。特筆する点は建具屋さんへの材料供給を特化したことである。さらに、新たな事業展開を目指し、木材用の自然塗料の開発に取り組むなどして製材業だけではなく発展を目指している。

**銘木** 銘木という言葉は明治の中頃に生まれたもので、それまでは多様な商品を扱う商売の一部で銘木を扱ったとのこと。池崎氏(富山市)は茶室や和室に使う銘木を選ぶ手伝いのために茶室について学び、建築大工や設計者の協力者としての関係にあったことがわかる。

**鋸の目立** 青山氏(南砺市)は遠方の修業先で3年間の修業の後、独立し

木工事の要となる鋸の目立てで生計をたて、後に刃物の販売も行った。切るものや季節によって目立てを変えるとのこと。県内にはもう同業者も後継者もないようだ。

**漆塗** 三代目の父の跡を継いで塗師(ぬし)となった柴田氏(富山市八尾町)の仕事は茶道具の棗(なつめ)から寺院の内陣(ないじん)までと多様である。建築では和室が減って漆を塗る機会は減っている。

**古代色塗装** 5年間の修業の後独立した今井氏(富山市)は古代色塗装という稀な職種で実績を積まれた。文化財の修復などに必要とされる技術なのでこの仕事は決して多くない。色の調合には試作の連続になるそうだ。

**トントン葺き** 三代目となる寺西氏(小矢部)は18歳でこの道に入り、3〜4年で現場を任されるようになったが、選木が出来るようになるにはもっと時間がかかった。25〜26歳の頃に板を割る機械を買い、作業の効率化に取り組んだが、ルーフィングの普及のために仕事は減った。

県内ではただ一人となった職人だが、後継者はいない。

**瓦葺** 18歳で父親の弟子として瓦職人の道に入った積永氏(立山町)は10年で一人前になったという。洋瓦などの新しい技術に取り組みながらも伝統的な技も継承しようと研鑽しているようである。瓦を使う機会は減っているものの、長い間使われてきた建築材料としての良さを引き出して今後に繋げていきたいとのことである。

**板金** 今回の調査対象者は修業開始年齢が15歳という方が多く、修業期間も比較的に長い。松田氏(富山市)は独立後には大型の機械を導入して大型物件を施工するなどして積極的に新しいことに取り組んでいる。

**銕金物** 天秤製作所(高岡市)は当初、仏壇・神輿金具を主に製作していたが、徐々に安価な外国製品に押されるようになった。そこで、原型を作る技術を活かし、神社仏閣からの一品ものを受注し、地元の勝興寺をはじめ、全国の社寺の銕金物を製作している。

**左官** 父の跡を継いで左官職人となった松浦氏(立山町)は同業者の家で4年間の修業をした。独立後は率先して新式の機械を取り入れて仕事をしてきた。難易度の高い建築家の仕事もこなし新しい技術にも前向きに取り組んでいる。

**タイル** 高校卒業後に東京のタイル店で修行を始め、25歳で地元へ帰って独立した堀江氏(氷見市)。修行先では長州風呂を作る技術学んだ。昭和40年代まではコーナー役物が無かった時代で、鑿でタイルの小口をはつり込み、両方から貼りこんだそうだ。

**建具(戸大工・指物・組物)** 昭和6年生まれの大木氏(砺波市)は小学校卒業後に住み込みで7年間の修業の後に独立し、事業の規模を大きくした。機械化もすすみ、後継者もあるようだ。昭和の時代には国産材を使っていたがその後米ヒバやスプルースへと変わり、最近又国産材の使用が増えてきたとのこと。

**木彫** 源(みなもと)氏(南砺市)は加賀藩前田利長に由来する井波大工の流れを受ける大工の家に生まれ、同業者の家で修業をして大工の腕を磨いたが、その後銘木の加工の仕事の依頼を受けるようになり銘木加工の職人となった。

**畳製作工** 父も畳職人だった畑氏(朝日町)は18歳でこの仕事に入ったが畳表は国産材を使い、畳床も地元産を使うという。後継者もあり66歳でも現役だ。

**配管工** 岡田氏(富山市)は18歳で配管工の仕事に就き先輩から技術を学び、25〜26歳ころには現場を任されたが、まだ自信がなかったためかこ

の頃が最も苦しい時期だったという。67歳の現在も現役の配管工である。

**型枠大工** 浅田氏(小矢部市)は先輩の型枠大工が作った海老虹梁を見て感銘を受け、局面の多い難しい仕事に積極的に挑戦してきた。CADも独学で学び、原寸の施工図を製作しており、新しい技術や情報にも前向きに取り組んでいる。

**鉄工** 小久保氏(高岡市)は会社の上司の仕事ぶりを見て鉄工の技術を覚えていった。螺旋階段の製作では多くの経験を持つ。職人の経験により熱によるひずみも計算した溶接が正確な仕事につながっている。CAD化にも対応して施工図の製作にも取り組んでいる。

**アルミ加工** 秋元氏(高岡市)は企業のなかの職人として新たな技術に取り組む、成果品は大型建築の外壁などのパネルになっている。企業内の職人を率いる立場として更なる技術の革新に挑戦している。

**石工** 石材店の四代目の高辻氏(高岡市)は同業者のもとで修業をし、石工となった。石の加工は昭和30年代にダイヤモンドカッターが使われるようになってから大きく変化したという。

**造園** 砂土居氏(砺波市)は父の家業を継ぎ造園業についた。14〜15年の修業の後にお客様から信頼されて仕事を任されるようになったとのこと。

土肥氏(上市町)は高校卒業後に父の家業を継ぐために修業に入った。かつては三叉を使って人力で重いものを持ち上げる仕事だった。現在は重機を使った仕事に変化したという。

**曳方** 会社の上司から仕事を学び曳き方の仕事を覚えた。曳き方には県内各地にそれぞれ特徴のある曳き方があり、高岡式、氷見式、富山式などがあるという。

**杭工** 才崎氏(射水市)は様々な職業を経験した後35歳でコンクリート杭打設業に就いたとのこと。かつては打ち込み杭工法が主流だったが、都市化の影響で騒音・振動問題をクリアするために埋め込み杭工法へとシフトしていった。

## 7. まとめ

木造建築の軸組製作がこの60余年で大きく変化した。日本の伝統木造建築は究極の地産地消の地場産業で、素材生産から加工組み立て仕上げまでを地域生産でまかっていたが、戦後の近代化の中で大きく変化した。

建築材料は地元産から県外産や世界各国からもたらされ、素材生産にかかる産業は衰退した。また、工業製品による見た目に均一で耐久性のある建材の使用が多くなり、建築の表情も多様になる一方で経年での風合いは無くなってきた。合理化のため工程の多い工法は廃れ、半製品の組み立てが多くなっている。

利便性の追求による設備機器の進化に伴い、水回りの工法が変化し、それに伴い住まい方も変化した。座式生活から椅子式の生活が多くなり、宗教に結びついた仏間などは造られなくなってきた。

これらの流れは、国民の住まい方の変化や利便性や経済性の要求に従った結果であり、国民生活は豊かになったとも言えるが、その結果失われたものも多い。この調査により、日本の生活文化と一体化していた伝統的な住まいが消えていく過程で失われたものがなにかが、少しは明らかになってきた。

職人が嘗々と取り組んできた建築生産の仕組みと人の技能の深み、そして社会の変化に追従し、自らも変化していった実態を理解していくことから、近年の和の住文化の再評価と新たなこれからの住まいの創出にどこかで繋がる可能性もあるように思われる。